

三両吟社と児玉果亭

——南宗画における詩画一致——

一 はじめに

児玉果亭は明治時代における、長野県を代表する南画家である。果亭は画家にして、詩人でもあった。果亭画塾を中心とした、三両吟社については、すでに「北信ローカル新聞」（中野市三好町、北信ローカル社、平成七年九月八日～十二月一日号）紙上に発表している。同一資料からの引用のため、重複している部分があることを記しておきたい。

児玉果亭については、すでに『紀要』（上田女子短期大学紀要十六号、一九九三年三月）で「画仙 児玉果亭の生涯——その文人的生活と画業」で発表している。また、果亭の師であった畔上楳仙については、つづいて『紀要』（上田女子短期大学紀要十七号、一九九四年三月）に「名僧 畔上楳仙の生涯——曹洞宗本山住職と管長の偉業」を書いた。もう一人の師、田能村直入については、更に『紀要』（上田女子短期大学紀要十八号、一九九五年三月）に「田能村直入と児玉果亭——明治の文人画盛衰について」まとめた。果亭の漢詩や俳句については、あまり知られていない。今回の研究によって、南宗画家は、「詩画一致」のために、勉強していたことが分かった。

山本秀麿

二 俳人一茶と果亭

信州の俳人といえば、まず、小林一茶を挙げなければならない。一茶は宝暦十三年（一七六三）に、上水内郡柏原に生まれる。そして、文政十年（一八二七）に六十五歳の生涯を終えた。

果亭は天保十二年（一八四二）の生まれである。したがって、一茶とは七十八歳の差があった。一茶没後十四年経ってからの誕生なのである。

一茶と果亭の接点について『児玉果亭画集』（昭和五十八年）の中で、果亭研究家内田恒雄は次の様に書いている。

「旅館経営、俳句にも関心」この旅館に、一茶が来泊していたことは『一茶全集』にも出ている。また、この旅館から地獄谷にも一茶は行っている。一茶がくると中野の梅塵も来るといいうようであった。

○ 座敷から 湯にとびこむや 初しぐれ
と、一茶はここで句をつくっているが、湯田中の湯本旅館で後の句には、

○ 座敷から 湯にとびいるや 初しぐれ
と改案している。

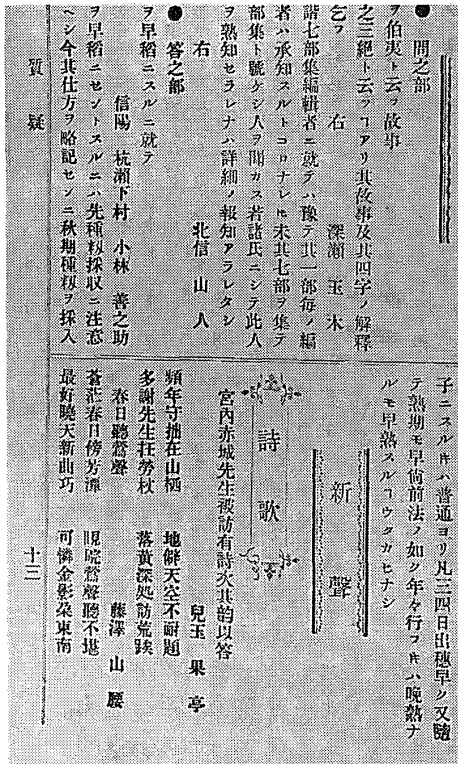
こういう因縁があつて果亭もたびたび句をつくっている。」「一茶が俳句の師匠として、奥信濃各地を旅している。しかし、この画集の解説は間違っている。

まず、果亭は旅館経営はしていないのである。一人娘の蘭が本家から婿養子を迎えて、明治四十一年以後に旅館（山本喜藤治経営探蘭館）を手に入れる。以後としたのは、当時、印刷された広告に、「明治四十一年十一月、澁温泉探蘭館、館主山本喜藤治」と出ているためである。

明治四十一年は、果亭が六十八歳で、明治四十五年（大正元年）には、病氣のため長野日赤に入院し、大正二年一月十四日逝去している。

次に、果亭が一茶の俳句に影響を受けて、興味を持ったとあるのは疑問である。果亭は、この地方の俳句の師匠である藤之本楽二と親交があつた。このために、漢詩なども含め、作詩を試みている。このことについては後述する。

この頃、果亭が作った詩が『真砂新誌・第八号』（瀧澤嘉蔵、興



『真砂新誌』果亭漢詩掲載頁



図1 児玉果亭筆「俳諧寺一茶翁肖像」(模写)

文社、明治二十七年）に出ている（写真参照）。

「詩歌 宮内赤城先生 被訪有詩 次其韵以答 児玉果亭

頻年守拙在山栖 地僻天空不耐題」

果亭が一茶に関心が無かつた訳ではない。

児玉果亭筆「俳諧寺一茶翁肖像」（図1）は、明治四十年の模写作品だ。原画は村松春甫と記してある。

三 俳人藤之本楽二と果亭

果亭が俳句に興味を持ち、友人として交友記録があるのは、藤之本楽二である。

児玉果亭筆「故藤之本楽二翁肖像」（図2）は、『藤乃雪』（明治二十六年発行）にあつたものである。

署名には「友人果亭写」とある。

『藤乃雪』は、神田竹治（豊田村）が所蔵している。この句集の発行人は瀧沢公雄（藤之本二世）と瀧沢嘉蔵で、ともに下高井郡平穂村上條（現山ノ内町）だ。印刷は東京南豊島郡戸塚村と記されて



図2 児玉果亭筆「故藤之本樂二翁肖像」

いる。同書によれば、

「信濃の國高井郡櫻澤の里藤牧氏藤の本樂二叟（おきな）俳諧の傳者……明治二十四年三月二十五日泉下の客となり……年六十有四藤興精舎に葬里藤本院閑譽雅好樂二居士と諡（おくり名）……」と出ている。

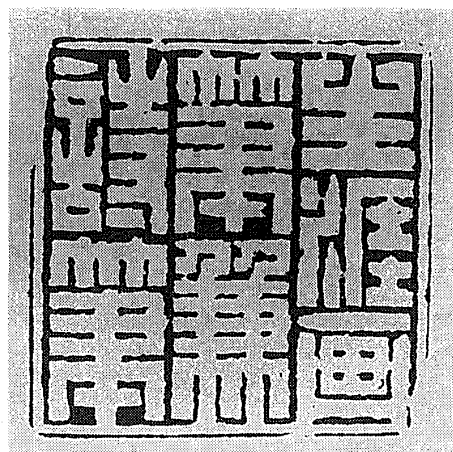
果亭と樂二については、友人とあるだけで、どのような交際があったかは分からない。しかし、果亭の筆になる樂二肖像は、その性格までも描写しているようだ。樂二は篤実温厚で、教え方は懇切丁寧だったと書いてある。この地方で、樂二の門下生の多くが活躍したことがうかがえる。

四 果亭の俳句

「生涯画筆兼詩筆」は、果亭が愛用していた印章の一つである（写真参照）。

この印章は、自ら詩作を願っていることを表明している。

今迄に果亭の俳句として紹介されているものでは、『画仙・児玉



果亭印章「生涯画筆兼詩筆」

果亭伝』「山ノ内町教育委員会、昭和四十年」に、九句収録されている。これによると、

「果亭の和歌は少しあるが、俳句には花庭（くわてい）の号を使ったものが幾つかある。

○ 駅うらは 千鳥な
く 大晦日

（六十九才）

○ 砂川や へりにホチホチ 路のとう （六十九才）

○ 横にして ひるねの門や 竹の竿

○ 俎板に 芹の香残る 月夜かな

○ 農に帰す 軍馬やさしき 柳哉

○ 塵塚に 一株早し 麦の秋

○ 鶴鴿の 尾ふり減す 日脚哉

○ 澄む音は 一葉なるべし 夜の窓

○ 青空や ひれふりたてて 鯉のぼり

更に『児玉果亭画集』（果亭保存会、信毎書籍、昭和五十六年）には、次の二句が加わっている。

○ 凱旋の 兵士統きて 餅の音

○ 露時雨 藪長春の 花の上

果亭は一筆画や俳画も得意としている。自作の俳句に俳画を添えたものが多い。

児玉果亭筆「農に帰す 軍馬やさしき 柳可奈」（図3）は、寒

図3 児玉果亭筆
「俳句と俳画」図4 酒井抱一筆
「駿耶」

沢（山ノ内町）の生玉太一所有の俳句と俳画である。

○ 農に帰す 軍馬やさしき 柳可奈（七十一歳、果亭しする）
馬と柳を文字でなく、絵を文字として使用している。この判じ絵を理解しないと、この俳句は読めないのである。また、農の文字も、上下に分解されたように「曲」と「辰」に見える。いずれにせよ、珍しい一幅の掛軸ではなからうか。

酒井抱一筆「駿耶」（図4）は、江戸後期の琳派の画家の作品である。果亭が生まれる以前の画家であり、この作品は、前出果亭作品に影響を与えたように思われる。

五 束松露香の果亭俳句評

果亭没年の大正二年一月十七日の「信濃毎日新聞」に、「果亭翁と俳句」と題して、束松露香の追悼文が掲載されている。露香は果亭の俳句は、世に稀だと認めることは、問題かもしれない。しかし、その作品は珍品というべきものである。このように書いた、露

香の記事を再録しておく。

「果亭と俳句」束松露香

古來、俳人にして畫に遊びたるは頗る多く、畫家にして俳宗を兼ねたる者も亦甚だ鮮少しとせず。

今、俳人にして畫に遊びたる者に指を屈すれば、森川許六の如き、與謝蕪村の如き、建部巢兆の如き、又我が信州諏訪の藤森素槩の如きも或は其然るものにして、而も此等は孰れも一世に其名を恣にしたる者と謂ふ可し。

又、現代の畫家にして俳句に遊ぶの徒も甚だ鮮少なからざるに似たり。現に、故久保田米僊の如き、其息金僊の如き、川端玉章の如き、中村不折の如き皆然りとなす。其他何、其他彼と一々指を屈するだに殆んど其煩はしきに耐えざるかに思ふ。然れども、現代南畫の泰斗と仰がれ、斯道の巨擘と目されたる我が兒玉果亭翁の私かに俳句に遊びたるを世に知る人は或は甚だ稀なるべし。往年、余病痾（明治四十五年より胃潰瘍になる）を上高井郡山田温泉に養ふや。偶々、來訪の一俳友にて病痾を慰めむとして一幅の畫を枕頭に懸けて之を見せしめたる者あり。就てこれを見るに豈圖らむや兒玉果亭が芭蕉十哲を描き、これに其の句を書したるものなり。」

文中にある「芭蕉十哲」について調べてみた。

兒玉果亭筆「芭蕉十哲」（図5）は、着色法紙本である。果亭には「果亭翁作芭蕉外六秀」という、楽陶の作品もある。

更に新聞記事が続けると、
「當時、余私かに爲以く、氣骨風神一世に超脱せる果亭翁にして、此等俳人に筆を染む。或は竊に蕉翁の風骨を慕ひ、更に其道を研究する者にあらざるなきかと。歸來、俳友太田吾風叟に此事



図5 児玉果亭筆「芭蕉十哲」

を以てしたるに、叟得々として曰く、有り、大に有りと。乃ち、翁自筆の『紅葉の巻』を示す。」

児玉果亭筆「紅葉の巻」(図6)は、新聞紙上の写真よりの接写である。この巻が現在どこにあるかは不明だ。明治四十一年頃の制作という。

果亭自筆の『紅葉の巻』には、果亭の俳句十六句が書いてある。今迄の十一句を加えると二十七句になる。新聞の続きを書く。

「果亭翁自筆の『紅葉の巻』を見るに、太田吾風叟と澁温泉の奥溪の紅葉を賞する約ありしも果さず。依て、翁は竹仙山房に在りて、其行を想像して一の俳書行を試みたる珍品なりとす。句數は、全巻を通じて僅に十六章に過ぎずして俳句も亦世に稀れたりとは認む可らざれど、而も翁の風骨は是に依りて其一班を窺ふ便りとはなるなり。此巻は今より六年前の筆なりとす。乃ち、同好者及び翁の風骨を慕ふ者の為に、左に之を掲ぐべし。

《もみぢの巻》 長野の吾風詞宗ぬしとは、久しき友がきにぞある。ことし紅葉の眞盛りを期して汗漫の瀧よりたでのいで湯までまかり見ぬと誘はれたれど、さる障りありて同伴せざりしはおしき事なりし。其明けがたに旅亭を立出でらる。おのれ遺憾のあまり、ぬしが道すがらのほどほど書綴り見むとおもひ起せ

し、昔、鸚鵡てふ鳥は狎れし人の口まねをよくするとぞ。われも吾風氏になれてほ句も眞似せばやなど、いかにをかしき事と、ひとりほほゑみて筆をとりぬ。」

果亭の俳句の上に番号を付けてみた。これは解説のためである。分かりやすくするため、果亭筆『紅葉の巻』案内図(図7)を示す。

「六時頃もはや出發なるべし。(行燈、茶器、煙草盆等の圖あり)」

- ① 我は寝て 居て羨し 紅葉狩
- ② 晴曇る 空も亦よし もみぢ狩

桑山の稻荷の社あたりを

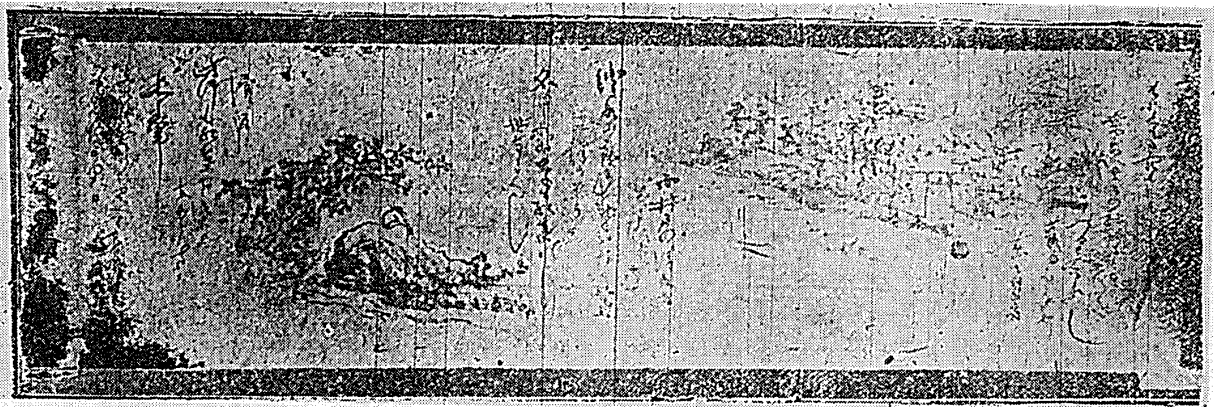


図6 児玉果亭筆「紅葉の巻」(部分)

- 思ひて、(稻荷社頭の圖あり)
- ③ うつり合ふ 藪の紅葉や 赤華表あかとりあ
- 小井戸の清水をむすびなるべし
- ④ 澄む水の 底に動くや むら紅葉
- 十二澤の原(圖あり)
- ⑤ 名もしれぬ 草も紅葉の 世なるべし
滑坂なめりさか(圖あり)
- ⑥ 此汗も 紅葉な染よ なめり坂

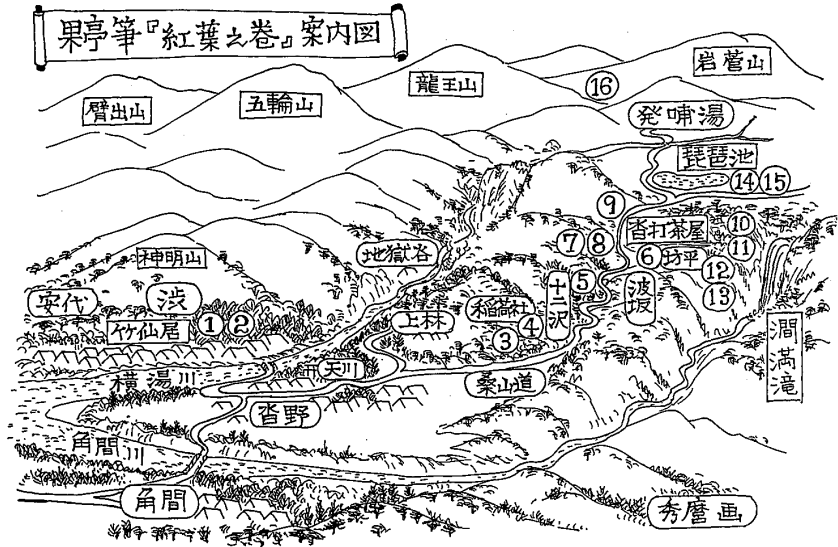


図7 果亭筆『紅葉之巻』案内図

- 長峰
- ⑦ 茶屋近く 見えて勇し 紅葉狩
- ⑧ 鼻先へ 紅葉突出ついで 九十九折つづら
- 沓掛の茶屋には休まれたるなるべし、(幾代餅茶屋の圖あり)
- ⑨ 紅葉見の 今年の味や 幾代餅
- 汗漫瀧は如何。(紅葉と瓢箪の圖あり)
- ⑩ 眼と耳の 果報得られて 瀧紅葉
- ⑪ 二歳の 秋を占めこの 紅葉哉
- ⑫ 瀧見るや 紅葉併あはせて 二度の秋
- ⑬ 今日頃は 丁度宜ようしき 紅葉哉
- 琵琶池は如何。(琵琶池の圖あり)
- ⑭ 澄むかぎり すむ池水や 秋の寂さび
- ⑮ くくり行く 紅葉の中や 河原小屋
- これより河水に傍そばひてのほれば、うさ口の瀧あり。溪水の三ツ處より落合うて、其奇絶快絶いふばかりなし。故に兎の口といふもをかし。こは道くどくどしければ、こたびの杖つえにはやめられしなるべし。後の遊びにものせられたきもの、今頃は、湯宿に着せられしならむ。(圖あり)
- ⑯ 行秋や 足を伸ばして 温泉の座敷
- 吾風詞宗の一笑を博す。果亭拝贈。
- 是れ素より翁が丹青の餘技にして、或は一時の即興に過ぎざるもの。これを以て直ちに翁の俳句を論ずるものあらば、开ひらは素より翁を知らざるものと謂ふ可し。尚、翁の近什きんじふを拾ふに、僅に左に二句を記録せり。
- 澄む音は 一葉なるべし 夜の窓 果亭
- 露しぐれ 藪長春の 花の上 同

此等の句は、一々味ふべきものといふべき歟。而して、翁今や亡し。余亦翁と親しく俳談を試みざりしを終生の遺憾とする也。

○ かさかさと からび果たり 冬紅葉 露香

果亭の俳友太田吾風は、しばしば竹仙居を訪れたらしい。また、東松露香は志賀高原が好きであつたようだ。『山の内の温泉』（山の内温泉旅舎組合、大正十五年）に、「詩に現はれた名所」に、

「安代温泉にて、

○ 瀧を見る 内湯も有りて 夏座敷 吾風

發哺にて、

○ 涼しさや 湯坪から見る 峯の月 露香

と二句が収録されている。

吾風が詠んだ、安代の瀧は「黒川瀧」のことであろう。自然豊かで、蜩も飛び交う、風情のある景色であつた。安代、渋温泉は崖を背負つて、横湯川に臨み、右側には沓野の丘が高い。両岸が迫つて、谷間になっている。この地で果亭は終日、絵の制作と詩作に時を過ごしたのである。

『長野新聞』（大正二年一月十七日）に、果亭の俳諧師風人物、衣裳に対する記事が出ている。

「翁は極めて率直にして畫家らしく衒ふを厭ひ平生も角帯か何で人のするやうな被布を着たり變挺な帽子など冠る事は大嫌ひであつた。嘗て或る畫家が羊羹色の被布を纏ふて來たのを見て殊更に解せぬ風で、お前は俳諧師かい私は俳諧屋サンになど用はないよ」と劍もホロロの挨拶をやつて追い歸したさうだ。」

俳人は姿や形式でないことを、暗に示唆しているのである。

六 門人山本凌亭の詩會記と果亭社中

果亭が渋温泉に面室竹仙居を建て、近隣の子弟を画塾に入門させている。隣村角間温泉の門人山本凌亭（慶応元年（昭和十三年）もその一人である。凌亭の父は山本伊兵衛という。伊兵衛は畔上樸仙禅師に就いて、漢学と書道を学んでいる。果亭と伊兵衛は、佐野興隆寺で、樸仙禅師の下で、机を並べた学友である。二人は両家を行き来していたと聞いたことがある。凌亭は子どもの頃から、果亭を知っており、雅兄として慕っていたという。

凌亭が書き残した『雜記帳』は、明治二十二年前後の日記帳である。この中に「元旦詩會記」がある。

「良友相會シテ以テ詩賦シ文ヲ論スルヲ俗ト爲ス……詞兄幸ニ香車ヲ枉ラレハ豈獨リ下筆ノ幸ノモナラズ亦社中榮耀ナリ。」

山本凌亭筆「句會之図」（図8）は、着色法紙本で未完成の作品のようである。

凌亭の『雜記帳』の詩會記を続けると、

「黃鸝声ハ斗柄ト共ニ春ノ新ナルヲ報ジ 梅花ノ影ハ旭日ト與ニ年ノ初メテ見ハシ 山河モ爲ニ其態ヲ換ヘ 人心ヲシテ自カラ舊去リ新ニ就シム是ニ於テ三両吟社ヲ會シ 詩ヲ賦シテ以元旦ヲ祝ス 既ニシテ各自ニ一ノ太白ヲ稱ゲ先新年ヲ祝シ次ニ此會ノ喜フベキヲ賀シ 陶然トシテ樂シ 頽然トシテ醉ヘリ 夜半衆賓ノ散スル後筆ヲ援テ之カ記ヲ作ル。」

文中の三両吟社については、この他にも「春日野遊ノ記」にも出ている。ここに紹介すれば、

「九十春光モ既ニ三分ヲ經過シ燒痕ハ翠ヲ摘ノ一場トナリ 蝶衣ハ翩然トシテ落花ニ飄エリ、鶯梭百轉ヲ垂楊ノ金絲ニ競ヒ春事

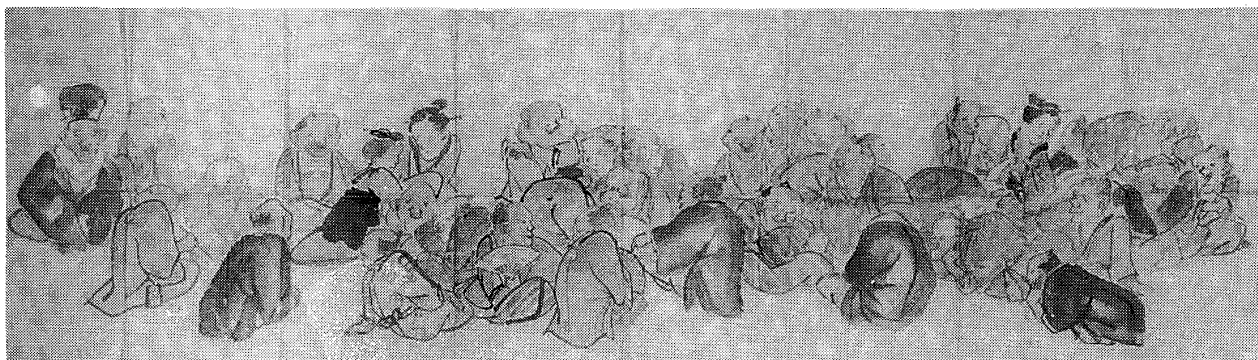


図8 山本凌亭筆「句会之図」(未完成)

ノ倅僂モ亦謂フヘカラス 是ニ
於テ三両ノ吟社ヲ誘シ 聊カ藜
枝ヲ城東ノ近郊ニ試ム 是日天
晴レ風和シテ花ハ紅白ヲ樹際ニ
争ヒ 草翠緑ヲ提ソ一二競ヒ其
風光眞ニ 画士モナラス 吟客
モ詠スル能ハズ 乃チ一茶店ニ
投シ 腰瓢ヲ開キ 太白ヲ浮ベ
陶然トシテ酔ヒ 日ノ將ニ西山
ニ傾カントスルヲ知ラス 終ニ
歸途ニ就ク

この他に「観菊ノ記」や「中秋
観月ノ記」など、社中の詞兄と白
酒の杯を傾け、吟詠を楽しむとあ
る。また、凌亭の俳句と俳画もあ
る。更に、凌亭の「雑記帳」よ
り、三両吟社について、関係する
ところを書き出してみると、

「螢火観ル記」三ノ吟社ヲ約
シ螢火ヲ某河ノ邊ニ一觀セント
欲シ 檄書ヲ作りテ之ヲ須回ス
到處皆諾ス 乃チ晩涼ヲ遂ヒ
へ策ヲ某河ノ沙上ニ試ム 時ニ
天色黯淡トシテ微風兩岸ニ起レ
リ 既ニシテ螢火東西ニ飄ヘリ
或ハ低テ水ニ落ル者アリ 或

ハ高クシテ雲ニ入カト疑カハレ 或ハ集リテ一ツ赤 提燈ノ如ク
或ハ散シテ残夜ノ星ノ如ク 或ハ草緑ヲ照シテ其光ヲ発ツテ的
燦タル者アリ 或ハ風力ニ堪ズシテ其光ヲ明滅スル者アリ 眞ニ
夏中ノ奇觀ト云フベシ 是ニ於テカ一社皆大ニ喜ヒ 前岸ノ酒樓
ニ登リ之ヲ遠望ス 其景色初メト甚タ異ナラズ惟其距離ノ稍遠キ
ヲ恨ムノミ 乃チ互ニ酔ヲ盡シ 歸テ之ヲ机上ニ置キ 螢火ニ對
シテ之カ記ヲ作ル。

詩作を目的とした、三両(両三と書いてある部分もある)吟社を
開く。社中の詞兄一同、螢火の乱舞に狂喜したとある。また、酔い
を覚ましてから、詩を書いている。

三両吟社については、正確には分かっている。中には凌亭が主
催している文章もある。主催する責任者は当番制であったのか、係
を仰せ付かっていたのかも不明である。

凌亭が詩作を試みている文章もある。「春雨ヲ聴ノ記」がそれだ。
「桃杏既ニ散シ 桜花モ亦將ニ稍ク盡ントス 晩春景色恰モ落花
ノ流水ニ漂フガ如シ 鶯梭ハ柳枝ノ間ニ懶々蝶衣ハ偏ヘニ菜花ノ
春ヲ戀フ 余モ亦樂所ナク 深ク柴門ヲ鎖シテ空シク吟哦ヲ香案
ノ傍ニ試ミ……。」

と書いている。

また、俳諧者を訪問している文章もある。

「仲夏紀行」仲夏某日 曉ヲ侵シテ程ヲ發シ 道ニ上リ 將ニ某所
ニ到ラントス 乃チ輕装シテ吟枝ヲ曳キ行ク 勝景ヲ探討……
緑陰鬱然タリ 又折テ行一里許リ一ノ草庵アリ 蓋シ俳諧者流隱
居スル所ナリ 乃チ徐カニ扉ヲ打ケバ 主翁出テ迎フ 小憩ヲ乞
フ茶菓ヲ喫シ 霎時ニシテ辞シ去リ……。」

ここに登場する俳諧者については、皆目見当がつかない。しか

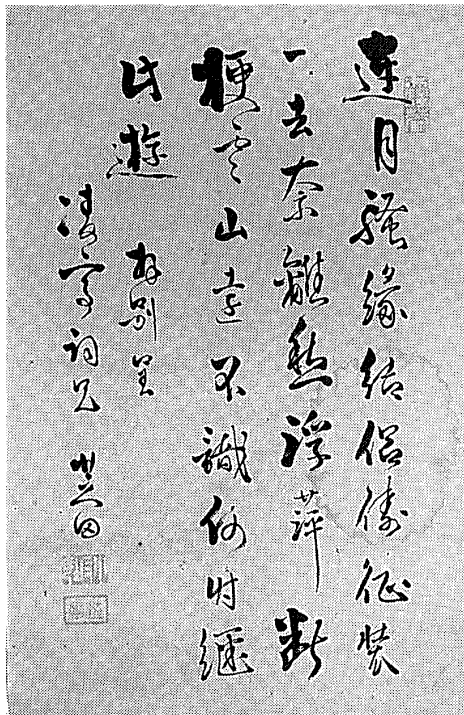


図9 小坂芝田筆「拝別呈・凌亭 詞兄」

し、凌亭の知人であるように思われるのである。また、家においては日夜読書し、作詩に努力していた文章もある。

「桐葉二感ズル記」涼風書幌ヲ侵シ 朗月湘簾ヲ移ス 正二是レ 讀書精ヲ研クノ時ナリ 既チ俗間ノ交際ヲ絶チ兀坐シテ日夜書ヲ 東窓ノ下ニ繙キ 更ニ雲時ノ怠慢ナシ 一日書卷ヲ収メ筆ヲ執テ 記スルアラントス……颯然トシテ頭上ニ觸ル者アリ 驚キ覺テ之 ヲ見レハ庭前ノ梧葉落テ机上ニ在リ……」

この文では、成人過ぎてても、その業は児童の如し。梧葉（あおぎりの葉）を以て戒（いさめ）としてしている。

凌亭は資産家の地主であり、佐野地籍より、角間温泉に移転した文章がある。

「轉居客ヲ招ク文」小生豫（まなもつ）地ヲ某（ぼく）ニトシ 一ノ小屋ヲ構ヘ以テ 讀書ノ所ト爲ント欲シ 今茲（こゝ）ニ至リ初メテ宿志ヲ達スルヲ得タリ 乃チ工（たくみ）ニ命經營兼旬（けいえいけんじゆん）ニシテ漸（よう）ヤク工ヲ竣（おわ）レリ……乞（こ）フ詞宗ノ 品評（ひんひやう）アラントヲ。頓首。

回復啓ニ過般經營セラルル所ノ土巧（どこう）既ニ落成ニ付移居ノ盛典ヲ

擧（あ）グルルハ実ニ欣喜（きんぎ）ノ至リト云フベシ 爰（こゝ）ニ又清人某氏ノ清樂ヲ試ミラル真ニ余輩同社中ノ盛舉（きよ）ト謂（い）フベシ……僕ノ幸福何ヲ以テ之ニ加ヘン 書外ノ如キハ詠（ぎ）日昇堂ノ時ヲ期セン。拝復。

文中清人は清士（せいし）のことで、清廉の士果亭と思われる。招かれた客は、果亭画塾社中の人達である。

門人小坂芝田（明治五年〜大正六年）が、凌亭に贈った漢詩がある。（図9）

「連月騷（せんげつそう）縁結（えんけつ） 侶儔（りゆう）征装（せいそう）一去奈（い） 離愁（りしゅう）浮萍（ふへい）断梗（だんけい）塞山（さいさん）遠不識（とくし）何時（いつ） 此遊（こゝ） 拝別呈（はいべつてい）

凌亭詞兄 芝田 叩（たた） 叩（たた） 明治二十三年芝田は上京して、従兄の中村不折の下宿に同居している。

明治十九年、凌亭が開業した角間温泉の旅館「やまもとや」に宿泊して、三両吟社のことを漢詩に書いたらしいものがある。

海雲無石正邪筆「両三風雅」（図10）には、

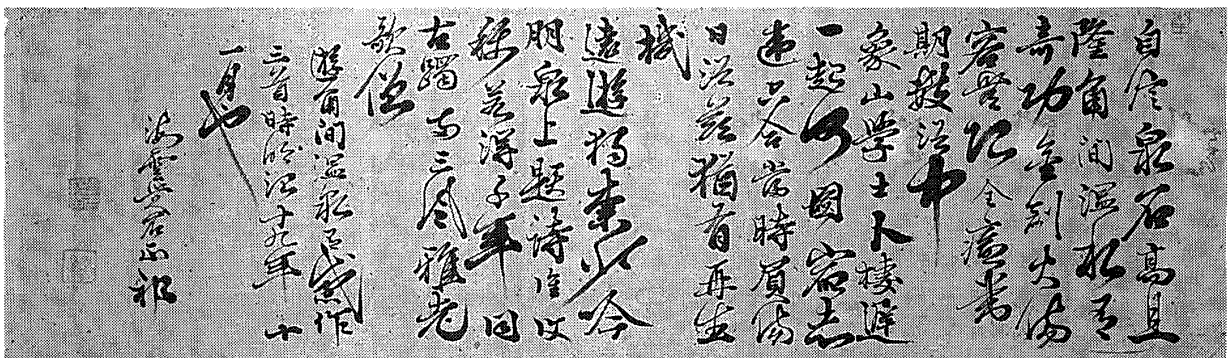


図10 海雲無石正邪筆「両三風雅」

「自分から信ず 泉石は高くかつ隆し 角間温泉の奇功は金に到る火傷の客常に期数浴中に全て癒る」

象山学士棲遲を卜う 一起何ぞ宿志の違いを図る 只合う當時の傷日をおう茲に沿って猶再生の機あり

遠くに遊び 楊李少吟朋 泉上文称に准えて題詩す 若して得

子年古蹟を同じくす 兩三風雅なり 老歌僧

角間温泉に遊び 三首を作るに惑あり

時明治十九年十一月也 海雲無石正邪 囀 囀

現代語訳には、少々無理な所があると思うが、今後の課題としたい。

七 三両吟社と南画の詩画一致

果亭社中の笹沢樸亭（安政二年～昭和十年）は、小県郡塩川村（現丸子町）の出身である。樸亭は『樸堂詩鈔』（信濃毎日新聞社印刷、昭和七年）を出版している。この中に、角間の山本凌亭を訪ねた漢詩がある。

「訪山本氏山居 杖藜日多涉溪頭。古木林中碧玉流。

竹繞小亭清欲滴。白雲來去鳥聲幽。」

樸亭はまた、諏訪の社中詞兄、藤森紫僊と上高井郡山田村の温泉で出会った時の漢詩もある。

「山田温泉藤森紫僊 由來靈境富詩資。邂逅相逢且歎奇。

詩酒未酬還別手。間愁一片步遲遲。」

この『樸堂詩鈔』の「序」に、果亭画塾に入門して、南画と詩文を学んだとある。それまでは、無文無詩。無読書であった。南画を描くもの、漢人のごとく、文章も作詩も南画も勉強したのである。この詩鈔の「あとがき」には、

「詩畫一致。是南畫之本領。而其畫人。未必能詩。兩能之者。」とある。

果亭が樸亭の詩稿に手を入れた手紙もある。これは『散木遺響』（正村竹亭、昭和十年）に収録されている。

「○明治三十八年二月二十七日書翰

拜復。其後は御達者にて大分御仕事も有之候様子、時局柄にも似ず御目出度事に被存候。詩稿直に御返壁申上候。少々筆も入れ申候。……二月二十七日 果亭

上高井郡山田温泉 湯本庄左衛門（俳号乳山）方宛 樸亭殿」
このように、果亭は絵の指導の他に、漢詩の指南もしている。

八 ま と め

果亭関係の資料を収集するため、果亭の曾孫である、児玉勝現当主に、関係箇所を案内してもらった。果亭の祖父禰五兵衛が再建した、洪温泉薬師堂に句碑がある（写真参照）。

「この碑は果亭の句碑と聞いております」とのことであった。

《かるかると 団扇捨てたる 夕かな 子明》

子明は佐久間象山の字名である。文字は果亭が書き、碑の建立に



象山句碑 果亭書
(洪薬師堂)

も尽力したと思われる。

一茶の影に隠れて、その名さえも忘れられている、地方の俳人にスポットを当ててゆきたいものである。

参考文献

- 『児玉果亭画集』(昭56・信毎書籍)
- 『真砂新誌・第八号』(明27・興文社)
- 『藤乃雪』(明26・興文社)
- 『画仙児玉果亭伝』(昭40・山ノ内町教育委員会)
- 『信濃毎日新聞』(大2・信濃毎日新聞社)
- 『山の内の温泉』(大15・山の内温泉旅舎組合)
- 『長野新聞』(大2・長野新聞社)
- 『櫟堂詩鈔』(昭7・信濃毎日新聞社)
- 『散木遺響』(昭10・櫟堂出版会)